

登場人物紹介

ケミス

シニティーの街を治める伯爵。公正な人物で、平民に対しても分けへだてなく接する。

フリードリッヒ

冷血なイメージを持たれている公爵。ある人を探して様々なイベントに顔を出しているらしく……

シータ

ケミス伯爵の娘。意地っ張りな性格でツツツしているものの、実はパパっ子。

シキ

超強いフェンリル。お父さんとしてアンを育てていたが、彼女と従魔契約を結ぶことに。

エルド

アンを保護した心優しいS級冒険者。アンのことを家族のように想っている。

アン

本作の主人公。森の中でシキに育てられ自分はフェンリルだと思いついていたが、実は幼女に生まれ変わった転生者だと気付く。



第一話 シニティーへ向けて

「アン、エルドよ。ポイズンモスの討伐、毒で衰弱した冒険者たちの回復など、いろいろと手を貸してくれたらいいではないか。何かから何まで世話になったな」

私——アンとエルドさんはエリーザ伯爵に呼ばれて、屋敷の客間で彼と向かい合うようにして座っていた。

どうやら、この街——エルランドでの私たちの活躍は、領主であるエリーザ伯爵の元まで届いていたらしい。それにしても、まさか異世界に幼女として転生して、貴族からお礼を言われるような立場になるなんて、前世の私が知ったら驚いて腰を抜かすかもしれない。

そう。私は転生者なのだ。

それもただの転生じゃなく、今流行りのいわゆる幼女転生というやつだ。

前世の私は、大学を出て中小企業の会社員になり、普通の人生を送っていた。けどある日、会社帰りに異世界転生ものの小説を買って、少し寝てから読もうと仮眠をとったら——目覚めた時には異世界で六歳くらいの幼女の姿になっていた！

さらに、私は捨て子だったらしく、フェンリルのシキに拾われて育ててもらっていたらしい。

それって、もう異世界版狼少女だよ……

そんな私は異世界転生特典なのか、不思議な力をいろいろと持っていた。その中の一つ【創作魔法】というスキルでいろんな調味料を作ってきた。

そして、それらの調味料を活かして街で屋台を出したところ、魅惑のソースを使っている屋台だと有名になってしまったのだ。

ちなみに、私が魔法で作った調味料には、特別な効果が付与される。たとえば治癒魔法だ。美味しくて、食べると元気になる料理。そこに私たちの屋台が人気な理由がある。

私たちの屋台のことは伯爵家の耳にも入っていたらしく、ある日、その魔法の効果でエリーザ伯爵を助けてほしいと声がかかった。伯爵はポイズンモスという魔物の毒で衰弱してしまっていたのだ。それで私はしばらく伯爵家で料理を作ることになり、エリーザ伯爵の体調を回復させていった。だけど今から数日前、ポイズンモスが街の近くに現れ、多くの冒険者たちが毒の被害を受けてしまった。彼らを癒すため、私は魔法の効果のマシマシにして料理を振る舞うことに。その結果、彼らは見違えるほど元気になった。まあ、ポイズンモスが街が襲われている中、私が料理に専念できたのは実際に戦ってくれたシキとエルドさんの功績が大きいだけだね。

私は少し前の出来事を思い出しながら、ちらっと隣に座るエルドさんを見る。

「お褒めに与り光栄です」

エルドさんは硬くなった表情で、エリーザ伯爵に頭を下げていた。貴族相手だから恐縮している

んだろう。

エルドさんとの関係は、私のことを魔物に攫われた幼子だと勘違いした彼が、山奥まで助けにきてくれたところから始まった。

実はその魔物というのが私の育ての親のシキで、攫われたというのは誤解だったのだけれど、エルドさんはフェンリル相手に逃げ出さずに私を助けようとしてくれたんだ。

今はその誤解も解けて、私の保護者役としていろいろとよくしてくれている。

うん。すぐお人よしのお兄さんってところかな？

そして、驚くことにエルドさんはS級の冒険者なのだ。

そんなことに気づけず、初対面の時に思いつきエルドさんを威嚇してしまったのは、今となっては恥ずかしい思い出である。

私がそんなことを考えていると、エリーザ伯爵がエルドさんの頭を上げさせてから続ける。

「話はアルベートから聞いている。冒険者たちを助けるために、これからシニティーに向かってくれるらしいな。丁度よかった。実はアンとエルドに頼みたいことがあってだな」

エリーザ伯爵の言葉を受けて、私とエルドさんは顔を見合わせた。

エルドさんも私と同じように、初めて聞いたといった顔をしている。

エリーザ伯爵はそんな私たちの反応を見て、小さく頷いてから続ける。

「どうやら、シニティーの領主であるケミス伯爵も、ポイズンモスの毒の影響を受けて少し衰弱し

ているらしいんだ。私ほど酷くはないようだが。アンの料理を食べたら体調がよくなったという手紙を出したら、その使用人がゼビアンを紹介してくれと言ってきてな」

そういうえば、エリーザ伯爵は仕事でシニティーに行った時に毒を浴びたんだけけ？

それなら、シニティーの冒険者たちやケミス伯爵が毒の粉を浴びていてもおかしくないか。

そういうことなら、私が向かうのが最善の選択なのかもしれない。

「冒険者たちも助けて欲しいが、ケミス伯爵の方も頼みたい。滞在費と旅費はもちろん負担する。

馬車もうちから一台出そう」

エリーザ伯爵が近くにいたアルベルトさんに目配せをすると、彼が一つの膨らんだ布袋をエルドさんに手渡した。

あれって、もしかしなくてもお金だよな？

私がちらっと見ると、エルドさんはその布袋を受け取って少し引いているようだった。

布袋の重さからどれだけ入っているのか察したらしい。

どうやら、旅費を心配する必要はなくなったみたいだ。

「どうか、わが友のことを頼む」

エリーザ伯爵はそう言うのと、私たちに頭を下げた。

私たちは慌ててエリーザ伯爵に頭を上げてもらって、その依頼を受けることにした。

どのみち、シニティーに行く予定だったし、その旅費を出してくれるというなら、むしろ好都合だ。

合だ。

こうして、私たちはエリーザ伯爵の依頼を受けて、正式にシニティーに向かうことになったのだった。



「……シニティーまでって、馬車でどのくらいかかりますか？」

「三日とちょっとくらいじゃないか？」

エリーザ伯爵の屋敷で依頼を受けた私たちは、エリーザ伯爵から借りた馬車で街道を移動していた。

のどかな風景が過ぎていく中で、静かに体を揺らされる。気温も心地よく、まさに昼寝日和と言えるだろう。

エリーザ伯爵のいい馬車なので、乗り心地がよく振動だつてそんなに気にならない。

それなのに、私はエルドさんからの返答を受けて、顔をしかめてしまっていた。

「み、三日間も馬車移動ですか」

「まあ、今夜は間にあるエネストっていう街で泊まれるし、そんなに大変な旅でもないだろ。何か気になることもあるのか？」

私が渋い顔をしていたのに気づいたのか、エルドさんは小首を傾げてそんな言葉を口にした。

……馬車移動が主体の世界で生きてきた人からすれば、何てこともないのだろう。

それでも、馬車に乗るのが前世を含めてもまだ二回目の私からしたら、この移動手段はなんというか、じれったい。

「あの、私もシキと一緒に馬車と並んで走ってもいいですか？」

「……やめさない」

私が控えめに提案すると、エルドさんは呆れたような声で私の提案を一蹴した。

街からエリーザ伯爵の屋敷までの距離くらいなら、馬車に乗るのも苦ではなかった。しかし、エレストまでほぼ丸一日馬車に乗り続けるというのは、結構大変だ。

ここ一ヶ月と少しの間はちゃんと人間らしい生活を送ってこられたのだが、時折フェンリルとして育てられた影響で体が疼いてしまう。

「アン。御者の人がいるんだから、絶対だめだからな」

「じゃ、じゃあ、二足歩行ならいいですかね！」

「いいわけないだろ。なんで小さな子供を馬車から降りして走らせるんだよ、完全に虐待だろ……ってどうか、初めは四足歩行で走るつもりだったのか？」

考えて妥協案を出したつもりだったのだが、エルドさんにジトつとした目を向けられてしまった。でも確かに、私が馬車に並走しているという光景は、エルドさんが私を虐めているようにしか見

えない。

それも、エリーザ伯爵家の御者の前でそんなことをしたら、いろいろとよくない噂が屋敷に流れてしまう可能性がある。

ここまでいろいろ世話になっているのに、私のせいでエルドさんの悪評が流れるのは嫌だなあ。

私が諦めたため息をつくとき、エルドさんはからかうような笑みを浮かべる。

「ちようどいい機会なんだから、馬車移動にも慣れておくんだな。これも人間らしく生きるための特訓だ」

私はエルドさんの言葉に渋々頷いて、馬車の外で快適そうに走っているシキを羨ましく思いながら眺める。

そして、私は夜になるまで馬車に揺られて移動することになり、何事もなくエネストという街に到着したのだった。

それから、宿に入った私はぐぐつと背伸びをしてから、腕をだらんとさせる。

「な、なんか変に疲れた」

馬車に座っていただけなのに……ずっとじっとしているのは、案外疲れるみたい。

私はそんなことを考えながら、受付を済ませてくれている御者を静かに待った。

本日泊まることになったのは、エネストの中心から外れている田舎の宿だった。

とはいっても、エリーザ伯爵のところの御者も一緒だったので、ある程度値段のする宿に泊まることにした。エリーザ伯爵からもらったお金は、あくまで旅費と滞在費。この旅の中である程度使わないと、エリーザ伯爵にも失礼な気がする。

ちなみに街の門番や宿の女将さんには、シキのことはいつものように私の使い魔のハイウルフだと説明している。フェンリルだと知られたら怖がらせちゃうからね。人語を話す魔物という時点で驚かれはするけど、そういうものだ結構納得してくれるものだ。まあ、すでにそこその人数にフェンリルだつて知られちゃってるし、最近はそんなに気にしないことにしたんだけどね。

そんなことを考えていると、御者と年配の女将さんがこちらにやってきた。
「アン様、エルド様。ご飯はこの宿で食べることもできるみたいですが、どうなさいますか？ いちおう、外にもいくつか飲食店はあるみたいなのですが」

御者の言葉を受けて、エルドさんが「どうしようか」と言つて私に視線を向ける。
なるほど。どうやら、素泊まりか食事つきか選べるタイプの宿らしい。

さて、どうしようかな。今日はエリーザ伯爵の屋敷を出てからずっと座りっぱなしだったし、何だか動きたい気分だ。でも、外に出ても食べたいものがあるかどうかは分からない。

私はそこまで考えて、御者の隣にいる女将さんを見る。

「あの、厨房を借りることってできますか？」

「ん？ ああ、全然構わないよ」

女将さんは優しい表情でそう言つて口元を緩める。小さな子供が料理に挑戦する姿を思い浮かべているのだろう。

エルドさんが私の考えに気づいたのか、嬉しそうに笑った。

「何か作ってくれるのか？」

「はい。元気があり余っているので！」

少し動きたい気分なら、自分で料理をしちゃえばいい。

私はそう考えて、厨房を借りて料理をすることにしたのだった。

これは別に、食事代をケチるとかさそんなじゃない。たまたま最近暇していたシキが狩りをしてきた食材が【アイテムボックス】にあつて、たまたま私が異世界転生特典で貰った能力で調味料を作れて、たまたま料理ができる環境だったから、作ろうと思っただけ。

そう、だから食事代をケチろうとか、そんな意図はないのだ……うん、たまたまだからね。ちらつと御者の表情を窺うと、どうやら異論はないみたいだ。

私は心の中で小さくガッツポーズをして、女将さんに案内されて宿の厨房へ向かったのだった。

それから、私は案内してもらった厨房で今晚の献立について考えていた。

まずは食材の確認から。

今回は、ポアポークという豚とイノシシの中間みたいな魔物の肉を使いたい。

ポアポークはシキが運動がてらよく森に行つて獲つてくる。なので、【アイテムボックス】には常にシキが獲つてきたポアポークがいっぱいあるのだ。

【アイテムボックス】というのは、時間停止機能付きで何でも収納できる便利スキルだ。このスキルのおかげで、いつでも解体したばかりの新鮮な精肉せいにくを使うことができる。

まさに、転生特典様々である。

私はそんなことを考えながら、エルドさんが解体してくれたポアポークの塊肉を取り出して、まな板の上に置いた。

さて、この食材で何を作ろうかな。

豚肉といえばとんかつのイメージがあるけど、とんかつは衣が必要だし、貸してもらった厨房でがつつり油ものをするのも気が引ける。

それでも、たくさんお肉があるわけだし、薄切りとかじゃなくてガツンと食べたい。

厚い豚肉を使ったとんかつ以外の料理といえば……豚肉の味噌漬みそづけけ？

味噌かあ。味噌が作れば、また料理の幅も広がるし、この機会に作れるか試してみようかな。

私はそう考えて、頭の中で味噌をイメージしながら【全知鑑定】のスキルを使って、味噌が何でできているのかを調べることにした。

【全知鑑定】というのは、調味料などの原材料を調べてくれるスキルだ。

たぶん他にもいろいろない道があるんだと思うけど……私にとっては、それだけでできれば十

分だ。

私が【全知鑑定】を使うと、目の前に味噌の原材料が表示された画面が現れる。

そこには次のように文字が書かれていた。

全知鑑定・味噌の原材料

大豆、麴こうじ、塩

なるほど……

醤油しょうゆといい、味噌といい、大豆の汎用性はんようせいってすごいんだなあ。

そんなことを考えつつ、私は味噌を生成するためにその味を思い出してみることにした。

発酵食品はつじょうしょくひんということでは不安はあるけど、醤油も作れたし、多分今回も問題ないはず。

私は意気込むように小さなこぶしを握ってから、手のひらを何も載っていない小皿に向ける。

イメージするのは、いつも味噌汁に使っていた合わせ味噌の味。

社会人になって一人暮らしをするようになってからも、よくインスタントの味噌汁は飲んでいたり、味噌の味は簡単にイメージできる。

私は味噌の材料が表示されている画面を見つめ、合わせ味噌の味と食感と香りを思い出しながら、それを形作るイメージを膨らませていった。

魔力の量と質は以前にマヨネーズを作った時と同じでいい。今回はむしろ味を重視する感じで【創作魔法】を発動させる。

すると、私が手のひらを向けている小皿が微かに光った。

小皿を覗きこんでみると、そこには私の知っている合わせ味噌のようなものの塊ができていた。

「うん、上手くできたっばい」

私は指の先で小皿に載っている味噌のようなものを掬って、ゆっくりと口に運んだ。

「んっ、美味しい。なんかすごいダシが効いている気がするけど……」

指に付けた味噌を舐めてみると、塩味と甘みのバランスが絶妙な味噌の味の他に、昆布ダシのような風味が口の中に広がってきた。

あれ？ 確か原材料には昆布とか書かれてなかったんだけどな。

「あ、これダシ入り味噌だ」

どこか懐かしさも感じると思ったら、これ実家で使っていたダシ入り味噌の味に似ているんだ。

あくまで、似ているというだけで、こっちの方が品があつて美味しい気がするけど。

そっか。想像した時の味噌汁の味がダシ入り味噌の味だったんだ。

「でも、ダシが入っているだけお得だよね。うん、こっちの方が美味しいし」

私は念のためにどんな味噌なのか確認しておこうと思って、【全知鑑定】を使用する。

すると、さっきまで味噌の原材料が書いてあつた画面が別の文字に変わった。

全知鑑定…魔法の合わせ味噌

日本の合わせ味噌を模して作ったもの

付与効果 『治癒魔法・小』

よっし、鑑定結果は特に問題ないみたいだ。

これで準備は整ったね。

さて、ここからは料理の時間だ。

まず初めに、ボアポークのお肉を厚さ一センチほどのサイズで切り、お肉を筋切りしておく。

次に、お肉につける味噌ソース作りに移る。

本当は玉ねぎとか生姜とかあればよかったんだけど、今回はそれがないからシンプルにいくことに。

作った味噌とみりん、お酒を2対1対1くらいの割合で器に入れて、そこに砂糖を少々加えてよく混ぜ合わせる。

後は作ったソースをボアポークのお肉に塗り、余ったソースはその上からかけておく。

そして、お肉を一時間ほど漬けてから、油を引いたフライパンに優しく投入する。

弱火で少しだけ焼いたら、蓋をして蒸し焼きにする。焼き加減を見ながらお肉に火が通ってきた

など思ったら、蓋を外して火を強めてしっかりと焼く。

後は、裏面に焼き色と味噌の焦げが付いたらひっくり返して、同じように火を通していく。最後に両面をしっかりと焼いて、フライパンに付いているソースをお肉に纏わりつかせたら……

『ポアポークの味噌漬け』、完成っ！』

程よく焦げた味噌の香りが厨房に広がり、それだけで食欲を強くそそってくる。これは食べなくても分かる……美味いやつだ。

私は人数分焼いた『ポアポークの味噌漬け』を皿に載せて、ウキウキな気分でエルドさんたちの元へと運んでいく。

「ご飯できましたよー、今日は新しいメニューに挑戦しました！」

私が『ポアポークの味噌漬け』を食堂に持っていくと、エルドさんは期待に満ちた顔をしていた。どうやら、調理をしていた時の香りが食堂まで漏れていたみたいだ。私がエルドさんの前に『ポアポークの味噌漬け』を置くと、エルドさんは聞こえるくらい大きくお腹の虫を鳴らした。

「おおっ！ 匂いだけでもう美味しそうだな」

それから、私が御者の分も机の上に置くと、御者は感動したかのように声を漏らす。

「私の分まで用意していただき、ありがとうございます」

「いえいえ、ここまで馬車を運転してもらったんだから当然ですよ」

私は深々と御者に頭を下げられて、慌てて顔を上げさせた。

「後は……」

それから、私は辺りを見渡して女将さんの姿を探す。

「すごい美味しそうなの匂いの食べ物だね。なんだいそれは」

その時ちょうどよく、食堂の奥から匂いに釣られたようで、女将さんがひょっこりと顔を覗かせた。

「あっ、女将さん。これよかったですら食べてください。厨房を使わせてもらったお礼です」

「え？ いいのかい？ ……香ばしくて、食欲が湧いてくるね。じゃあ、ありがたくださいか
かね」

それからエルドさんを見ると、すでに両手に一枚ずつ『ポアポークの味噌漬け』が載せられている皿を持っていた。

「シキのところでは食べるだろ？ アンも自分の分を持ってきてくれ」

「あっ、分かりました」

私は流れるようにシキの元に行こうとするエルドさんに置いていかれないように、自分の分を持ってその後を追いかけた。

エルドさんと並んで歩いていると、馬車を停めた場所にいたはずのシキが、私たちのすぐ近くまで小走りやってきました。

上機嫌に尻尾を振っている様子は、餌をもらえると喜んで近づいてくる大型犬そのものだ。

「今日はまた違った匂いがするではないか。新しい料理か？」

「うん。今日は味噌っていう新しい調味料を使って、『ポアポークの味噌漬け』を作ってみました」

「味噌？ それがこの香りの正体か……実にうまそうだ」

エルドさんが腰を下ろしてシキの分を置くと、シキは今にも涎を垂らしそうになっていた。

「それじゃあ、冷める前に食べてみてください」

私がそう言うと、二人は待ってましたとばかりに表情を緩めてから、『ポアポークの味噌漬け』を口に運んだ。

「おおっ、うまつ！ なんだこの癖になる味は！」

「うまいっ、うまいぞっ！ 濃縮された旨味がガツンとくる味噌というソースが素晴らしい！」

エルドさんとシキは一口味噌漬けを食べると、そのまま食べる手を止めることなく夢中になってしまっていた。

どうやら、味噌もこの世界の人に受け入れられる調味料らしい。

……いや、受け入れるどころかハマるくらいの勢いみたいだ。

私は美味しそうに食べる二人を見てから、二人に倣うように『ポアポークの味噌漬け』を口に運んだ。

「んんっ！ お、美味しいっ」

口の中には優しいダシと味噌の風味がふわっと一気に広がってきて、それが鼻から抜けていく。

焦がした味噌の旨味とポアポークの油が口の中で溶け合って、そこに味噌の甘みと塩味が絡んでくる。

「これは、少し美味しすぎる気がする」

エルドさんとシキががつつく姿を横目で見ながら、気づいた時には私もその味に魅了され、二人と同じようにバクバクと食べていた。

こうして、私は前世ぶりに食べた味噌の味を存分に楽しみながら、料理の幅がまた広がったことを嬉しく思うのだった。

第二話 シニティーのお出迎え

私たちはエネストの宿を出てから馬車で数日移動して、無事シニティーにたどり着いた。

シニティーの街の雰囲気はエルランドとあまり変わらない。

それでも、何となく街の雰囲気が明るくないのは、ポイズンモスの被害を受けてまだ間もないからだろう。

私たちは冒険者ギルドを覗く前に、ケミス伯爵の屋敷に向かうことにした。

見ず知らずの実績もよく分からない子供が『炊き出し手伝います！』と言うよりも、領主様の体

調を回復させた料理人っていう肩書があった方が絶対に事が上手く進む。

それに、ケミス伯爵を助けたいということでエリーザ伯爵に馬車やら旅費やらいろいろ出してもらったのに、そちらを後回しにするというのもよくないだろう。

私たちはそう考えて、馬車を伯爵の屋敷の方に走らせてもらっていた。

徐々に屋敷が見えてくると、屋敷の門の前に多くの使用人さんたちが立っていた。

そして、中に招かれて馬車から降りると、ずらりと並んでいる使用人さんたちが私たちに頭を下げていた。

「えっ？」

私とエルドさんが突然の事態に驚いていると、そのうちの一人が顔を上げて一歩前に出る。

「お待ちしております。アン様、エルド様。わざわざシニティーまでお越しくださりありがとうございます。旦那様がお待ちですので、客間に案内させていただきます」

「え？ あっ、はい」

なんで貴族でもない私たちが、こんなに丁寧に扱われているの？

私は思ってもみなかったお出迎えの前に、驚きを隠せずにいた。

それから、すぐに使用人さんに案内されて、私たちはケミス伯爵の屋敷の客間に通されたのだった。

私たちが客間に入ると、ソファアに座った男性が待っていた。

エリーザ伯爵と同じ四十代くらいの風貌で、赤茶の髪を後ろでくくっている。綺麗な顔立ちをしていて、着ている服にもどこか高級感がある。

多分、この人がケミス伯爵なのだろう。

普通にソファアに腰かけているところを見ると、そこまで酷いわけではないようだけど、頬が少しこけていたり、肌が健康的な色でなかったりと、体調は悪そうだ。

やっぱり、まだポイズンモスの毒の後遺症があるみたい。

ケミス伯爵は私たちに気づくと、小さく笑みを浮かべて話し始めた。

「よく来てくれた。あなた方がエリーザ伯爵やエルランドの冒険者たちの命を救ったという、奇跡の料理人の方々か」

「ぎ、奇跡の料理人？ い、いえ、そんなにすごいものじゃないです！」

私は咄嗟に否定したのだが、ケミス伯爵は「謙遜しなくてもいいじゃないか」と言って、私とエルドさんを正面に座らせた。

……エリーザ伯爵、私たちのことをどうやって伝えたのだろうか？

話が盛られている気がしてならない。

私がそんな不安を感じていると、ケミス伯爵は続ける。

「厨房にある食材は好きに使ってくれて構わない。もしも足りない場合は使用人に言ってくれたら、可能な限り何でも揃えることを約束する」

「そ、そんなに手伝ってもらわなくても平気ですよ」
これって、すごい期待されてない？

私が眉を下げてみせたけど、ケミス伯爵はただ優しい笑みを浮かべるだけだった。
どうしよう、あまりにもハードルが上がってしまっている。

それで私が気まずさを覚えてケミス伯爵から視線を逸らした時、どこから見られているような
気配を感じた。

しかし、ぐるっと部屋を見渡してみたが、陰から私を見ている人はいなかった。

あれ？ 気のせいかな？

「アン。さっそく厨房に案内してもらわないか？」

「そう、ですね。そうしましょうか」

結局、私はその視線の正体は何だったのか分からないまま、使用人さんに厨房まで案内してもら
うことになったのだった。

厨房では、私はエルドさんと二人だけにしてもらった。

さすがに、魔法で調味料を作っているところを見られるのはあまりよくないですよ。

「それじゃあ、どんな食材があるか確認しますか」

私はそう言って、食品庫の中を確認した。

そこにあつた多くの食材を前にして、私たちは「おおっ！」と感動の声を漏らす。

「すごい種類がありますね。美食家なんでしょうか、ケミス伯爵って」

「それもあるかもしれないけど、多分俺たちのために用意してくれたんじゃないか、これって」

「え、さすがにそんなことは……」

私はそこまで言いかけたところで、私たちへのケミス伯爵や使用人さんたちの態度を思い出した。
『他の領土から招いた奇跡の料理人』。

私たちが本気でそんなふうに使われているなら、期待の大きさからこれだけ多くの食材を揃えて
いても不思議じゃない。

どうしよう。めんつゆで『お雑煮スープ』でも作ろうと思っていたのに、少し凝ったものを作ら
ないといけないかもしれない。

「何か凝ってる料理を作れるのがベストですけど……あれ？ え、エルドさん！ これなんです
か？」

主食はどんなのかあるのかと思つて確認してみると、そこには少し太い麺類のようなものが
あつた。

私は見覚えのある食材を前に、少しテンションを上げながらエルドさんに尋ねる。

「ん？ ああ、それは『穀麵』だな」

「穀麵？」

「ああ。パンとかに使ってる穀物を麺にしたものだ。確か、シニティーって昔から穀麵を使った屋台とかもあった気がするな」

なるほど……まさか、この世界に麵まであるとは。

まあ、パンがあるのだから、主食のパターンとして麵があってもおかしくはないか。原料は小麦で同じだしね。

私はエルドさんの言葉を聞いてから、【全知鑑定】のスキルを使ってその麵がどんなものなのか鑑定することにした。

私がスキルを使うと、何も無いところに小さな画面が現れて、そこに穀麵に関する情報が表示された。

全知鑑定…穀麵（太）

穀物からできている麵

日本のうどんとほうとうの間のような麵

おお、全く知らない感じの味だったらどうしようかと思っただけど、案外馴染みのある麵に近いみたいだ。

『太』ということは、他にもいくつかバリエーションがあるのかな？

「うん。それなら、あれがいいな」

私は一つの料理を頭に浮かべて、口元を緩める。

まさに名前からして凝っていることが分かる料理だよな。

「おっ、何か思いついたのか？」

「はい。とりあえず、調味料から揃えないとですね」

私はそう言うってから、前世で口にしたことがある赤味噌の味を思い浮かべながら、【全知鑑定】のスキルを使用した。

すると、またも画面が現れて、そこに赤味噌の原料が表示された。

全知鑑定…赤味噌の原材料

大豆、麴、塩

あれ？ 原材料は赤味噌も普通の味噌と変わらないんだ。

それなら、多分失敗せずに作ることができるだろう。

私は原材料が表示されている画面を見つめながら、小皿を出して【創作魔法】を使用する。

赤味噌の香りと舌触りを思い出す。それから、込める魔力を多くして、以前にエリーザ伯爵やエルランドの冒険者のために、魔法のめんつゆを作った時と同じような魔力の質に変えていく。

すると、小皿が強い光を放った。

光が収まってから小皿を覗き込むと、そこには普通の味噌よりも赤みがかつた茶色の物体があった。

「よっし、見た目は成功かな。後は魔法の効果がどうなっているかだけど……」

私はドキドキしながら、出来たばかりの赤味噌のようなものに【全知鑑定】のスキルを使った。すると、さっきまで赤味噌の原材料が書かれていた画面の文字が変わり、そこに鑑定結果が表示される。

全知鑑定…魔法の赤味噌

日本の赤味噌を模して作ったもの

付与効果 『治癒魔法・中』『滋養強壮・中』

「やったあ！魔法の方も問題ないみたい！」

私は鑑定結果を見て、思わずガッツポーズをしていた。

付与された魔法は、めんつゆを作った時と同じものだった。

ケミス伯爵も彼らと同じ症状で悩んでいるわけだし、この魔法の赤味噌を使って作った料理を食べれば、きっと体調がよくなるはず！

「おおっ、また見たことがない調味料だな。あれ？でも、見た目が前に作った味噌っていうのと似てるか？味噌の仲間なのか？」

「さすがエルドさん、鋭いですね。その通りです。今回作る料理には普通の味噌よりも、こっちの味噌の方が合うんですよ」

私はエルドさんにそう言って、腕まくりをしてさっそく料理に取り掛かることにした。

まず初めに、鍋の中にみりんとお酒を1対1で加えて、それを水で薄めていく。それを中火にかけながら、程よいタイミングでみりんの半分の量の赤味噌を溶かす。

そこに、クックバードのお肉を一口大に切ったものと、香りがしっかりとっているキノコを切って加える。

さらに、ネギのような野菜を斜め切りにしたものと、葉物の野菜を適当に切って鍋に投入する。これらをしっかりと煮込んでから、そこに穀麵を加えて柔らかくなるまで再度煮込む。

最後に、火を止めてそこに再び赤味噌を溶かして入れる。

二回に分けて赤味噌を入れることで、具材に味をしみこませつつ、ちゃんと味噌の風味を感じるように仕上げられるらしい。

ともかくにも、これで『味噌煮込み穀麵』の完成だ。

「うおおっ、なんかすごいまそうなのができたな」

「はい。それでは味見をしましょうか」

私がそう言うと、エルドさんは分かりやすく頬を緩めた。

そうだよね。こんな近くで赤味噌の香りを嗅ぎ続けたんだから、すぐにもこの味を確かめた
いって思うよね。

私は味噌煮込み穀麴の汁を入れた小皿を二つ用意して、そのうちの一つをエルドさんに手渡した。
湯気に乗って運ばれてくる赤味噌の香りに当てられて、私たちはその小皿をすぐに口に運んで
いた。

「うまつ……なんだこの深み」

「これは、美味しいですね。コクが口の中に広がります」

一口、味噌煮込み穀麴の汁を口に運ぶと、赤味噌の甘さ控えめな風味が広がり、若干の渋みと旨
味が後から押し寄せてくる。

味噌のコクに食欲を刺激されて、すぐにでも麴をすすりたくなる。

これはなかなか素晴らしいものができた気がする。

「後は……ケミス伯爵の分だけです、追加でトッピングしますね」

「追加？」

「まあ、本来ならこれがあって完成形なんです、大きな鍋で人数分作るは難しいので、ケミス伯
爵の分だけです」

私はそう言うと、お玉にクックバードの卵を落して、そこに味噌煮込みの汁を少し入れた。そし

て、卵を載せたお玉をそのままお鍋の汁に当てる、湯煎ゆせんするかのように入火を入れていく。

「このくらいですね。エルドさん、鍋の中身を一杯分お皿に盛ってくださいますか？」

私がそう言うと、エルドさんは別のお玉を取ってきて、お皿に鍋の中身を盛り付けてくれた。

それを受け取った私は、その真ん中にお玉の半熟卵を載せた。

「よっし、これで本当の完成です」

やっぱり、味噌煮込みうどんには半熟卵がないとね。

こうして、半熟卵を載せたことで、ケミス伯爵の分だけ本当の『味噌煮込み穀麴』が完成したの
だった。



料理が完成したことを使用人さんに報告すると、すぐにケミス伯爵の元に運んでくれることにな
った。私とエルドさんも脇にある食堂に案内される。

「ご主人様、こちらがアン様がお作りになった料理です」

そして使用人さんが、席について待っていたケミス伯爵の目の前に『味噌煮込み穀麴』を置いた。
厨房から運ばれてきたそれは湯気を纏っていて、その湯気が味噌の香りを周りに振りまいている
ようだった。

「おお、すごいいい香りがするな」

ケミス伯爵だけでなく、使用人さんたちまで食欲を掻き立てられたのか、その場にいる全員の視線が『味噌煮込み穀麵』に注がれていた。

私もさつき味見をしたはずなのに、自分で作った料理の香りにやられてしまっていたみたい。ケミス伯爵が私の方に視線を向けていたようなのに、声を掛けられるまで気づかなかった。

……味噌の魔力というのも、なかなか恐ろしいものだ。

「これは一体、どういう料理なんだい？」

「味噌という調味料で穀麵を煮込んだものです。エリーザ伯爵に出したものと異なりますが、こちらと同じ効果が得られるかと」

「味噌？ 初めて聞く調味料だ。どれ、いただいてみるとしよう」

私がそう答えると、ケミス伯爵は首を傾げる。

しかし、すぐに『味噌煮込み穀麵』を口に運んだ。

そして、一口食べた瞬間に感動したような声を漏らした。

「これはっ……うまいぞ。なんだこの旨味が凝縮されているような味はっ」

ケミス伯爵は目を見開いて私を見つつ、手が止まらないのか次々と『味噌煮込み穀麵』を口に運んでいった。

そうだね。味噌煮込みうどんってしばらく止まらなくなるよね。

私は心の中で勝手に頷きながら、そつと口を開く。

「味噌は風味とコクが強いのが特徴の調味料です。えっと、世にあまり出回っていない貴重な調味料ですね」

「やはり貴重なものなのか。しかし、なるほど……これは、食べる手が止まらなくなるな。半熟の卵を割るタイミングに悩むところではあるが」

ケミス伯爵は味噌煮込み穀麵のスープを少し口に流し込んでほっと一息ついたと思うと、真剣な顔で悩み始めた。

まさか、卵を割るタイミングをそんな真剣な顔で考えてくれるとは。

これは作り手としても嬉しい反応だ。

……なるほど、初めはエリーザ伯爵とタイプが違うのかと思っただけ、料理に対していい反応をしてくれるところはよく似ているみたいだ。二人の仲がいいというのも頷ける。

「卵を割ると味がまるやかにになります。決して味噌の風味の邪魔じまはしないので、お好みのタイミン
グでどうぞ」

「そうか。では……おお、卵が絡みつくと、ここまで変わるか。微かに溶けだしていく卵の黄身と
スープが混ざり合って、味噌という調味料のコクが引き立つな」

ケミス伯爵はさつそく半熟の卵を割って、その味の違いを楽しんでいるようだった。

これだけ楽しんでくれるのなら、これは大成功と言えるだろう。



私が達成感から微かに口元を緩めていると、どこから視線を感じた。
この感じ、まただ。

初めてこの屋敷に来た時にも感じた視線。勘違いだと思っていたけど、どうやらそうではないらしい。

私はしばらくの間、気づかないフリをして油断させた後、視線の主ぬじがいるであろう扉の方に勢いよく振り向いた。

「っ！」

その瞬間、完全に目が合った。

赤茶色の髪を二つ結びにした幼い女の子。その子が扉の奥から私のことを覗き見ていた。

その子は私と目が合うとあわあわした様子になった。それから、最後に私を睨にらみ、逃げるように扉から離れていく。

あれ？　なんで私睨まれたの？

私は初めて会ったはずの幼女から睨まれる理由について考えてみたが、結局その理由は分からな
いままだった。

本当に、なんだったのだろうか？



『味噌煮込み穀麵』の評判はすこぶるよかった。

ケミス伯爵に、『数日間食事を作つて欲しい!』と頼まれるほど喜んでもらつて、私たちはしばらくケミス伯爵の屋敷でお世話になることになった。

翌日、冒険者ギルド宛に私たちの推薦状すいせんじょうも書いてもらったので、冒険者たちに料理を振る舞うためさっそく冒険者ギルドに向かうことに。

屋敷の客間から玄関に向かおうと廊下を歩いていると、食堂の方から何か焦げ臭い匂いがしてきた。

この匂いは、少し焦げちゃつたのレベルを大きく超えている。

「エ、エルドさんこの匂いって——」

「まずい、火事かもしれないぞ」

食堂の奥には厨房がある。火事が起きているとすればそこだとは思うけれど、ご飯が近いわけでもないこんな時間に火なんて熾むさすことがあるのだろうか？

私はそんなことを考えながら、駆けだしたエルドさんの後ろを付いていった。

食堂を駆け抜けて、すぐにその奥にある厨房に向かうと、そこには使用人の女性と小さな女の子

の後ろ姿があつた。

「大丈夫ですか!」

エルドさんが叫ぶと、二人はその声に驚いたのか肩をビクンとさせてから、こちらに振り向いた。

「あつ、昨日私のこと見てた子だ」

私は子供の顔を見て、反射的にそう言っていた。

すると、その女の子は体をびくんとさせてから、気まずそうに私から視線を逸らす。

どうしたんだろう？

そう考えながら女の子を見てみると、その子の手元には黒く焦げた……塊？ が数個並べられているトレーがあつた。

「あれ？ 火事かと思つたんですけど……」

すると、その女の子は私と焦げた塊を交互に何度か見て、じんわりと目に涙を溜ためてしまう。

そしてトレーを力強く厨房の机に置くと、目元を服の袖そでで押さえながら私とエルドさんの間を走り去っていった。

「え、ちょ、ちよつと」

あれ？ もしかして、私が泣かせちゃつたのかな？

何か悪いことをしてしまっただろうかと考えてみたのだが、まるで思い当たる節がない。

「申し訳ございません。シータ様が大変失礼なことを」

私が頭を捻^{ひね}つていると、その様子を見ていた使用人の女性が頭を下げてきた。

「いえ、大丈夫ですよ。えっと、あの子ってシータって言うんですか？」

「はい。旦那様の末っ子にあたる方です。その……少しか意地になってしまっているみたいで、アン様に失礼な態度を取ってしまったのだと思います」

「意地になってる？」

「はい。ご主人様が体調を崩されてから、シータ様も気になさっていたみたいで、旦那様にお菓子を作って差しあげていたんです。旦那様も喜んではいらなかったのですが、どうしても残してしまうこともありました」

ポイズンモスの毒を浴びた後の衰弱状態というのは、酷くなるとしばらくの間ご飯を食べられなくなるほどのものだ。

そんな状態でも娘が作ったお菓子を食べようとしていたケミス伯爵はいい父親だと思う。

それに、父親のためにお菓子をやるなんて、よくできた娘さんだ。

「ですが、昨日、同じ歳くらいのアン様が作った料理を美味しそうにめしあがっているところを見て、シータ様は嫉妬^{しつと}してしまっただけなんです。それで、アン様よりも美味しいものを作るんだと張り切った矢先……自分が失敗しているところをアン様に見られてしまい、悔しくて泣いてしまったのかと」

「……な、なるほど」

つまり、大好きな父親が自分の作ったお菓子は残すのに、同年代くらいの私が作った料理はもりもりと食べていたのが面白くなって、嫉妬^{しつと}してしまっただけというわけか。

だから、あんなふうには私のこと睨^{にら}んでいたんだ。なんか、可哀想なことしたかも。

……そりゃあ、お父さんを取られたかと思つて、逆恨^{さかみ}みもするよね。

ようやく睨^{にら}まれていた理由が判明したのはいいが、これからどうしてあげるのがベストなのか。

私もケミス伯爵に料理を作るのをやめるわけにはいかないから、この問題を解決するのは少し難しそうな気がした。でもまあ、時間が解決することもあるか。

そう考えて解決を先延ばしにしようとした翌日。

屋敷の客室から出た時に視線を感じてそちらを見てみると、廊下の曲がり角にシータ様がいた。

シータ様は私と目が合うとまたあわあわとし始めた。それから、作ったような表情で私のことを睨^{にら}むと、腕を組んで近づいてきた。

「私と勝負しなさい」

「……はい？ 勝負、ですか？」

「そうよ。お互いにお菓子を作つて、どっちがお父様に美味しいって褒^ほめてもらえるかを決めるの！」

シータ様は少し舌足らずな話し方をしており、怒つていることを伝えるために私を睨^{にら}んでいる

たいだった。

なんだか、どこか微笑ましい。

それに、判定もどっちが美味しいかじゃなくて、褒めてもらえるかなのか。

……この子、なんか可愛いな。

「お菓子作り勝負って……昨日丸焦げにしませんでした？」

私は思わずそんなことを言ってしまう。

「あれは、お父様があなたの料理を食べて香ばしい？ とか言って美味しそうに食べていたから、私も焦がしてみたのよ！」

香ばしい？ あ、そういえばケミス伯爵に『ポアポークの味噌漬け』も出したんだっけ？

ケミス伯爵が他の味噌料理も食べたいと言っていたから、『ポアポークの味噌漬け』を作ったんだった。

確か、あの時にケミス伯爵がそんなことを言っていた気がする。

「いや、香ばしいと焦げ臭いは別物ですよ？」

「だから、あの時は失敗したの！ 今度はちゃんと香ばしいクッキーを焼くんだから！」

「こ、香ばしいクッキー……！」

なるほど、あの黒い物体は香ばしさを追求した末の残骸ざんがいだったのか。

いろいろと間違えている今の状況で、とてもお菓子対決なんかできる気がしない。というよりも、

勝負云々以前に、ダークマターを食べさせられるかもしれないケミス伯爵が可哀想だ。

「シータ様、よろしければ私がクッキーの作り方を教えて差し上げましょうか？」

「本当!？」

シータ様は一瞬目を輝かせて喜んだが、すぐに何かに気づいたように私から顔を背そむけた。

「はっ！ ラ、ライバルからの施ほししなんか受けないわ！」

シータ様はそんなことを言いながら、私の方をちらちらと見てくる。

なるほど、これが意地になっているという状態か。

多分、昨日一緒にいた使用人さんだっけクッキーの作り方くらいは知っているはず。

それなのに、あんな失敗をしたということは……この子、香ばしさを追求するばかりに、使用人さんのアドバイスを聞かなかったな。

そうだとすると、私に対抗心を燃やしているなら、私が教えるって言っても素直に教わる気はないか。

……それなら、少しアプローチの方法を変えてみるかな。

「ライバルとして、シータ様がどんなものを作るのか知りたいと思うのは当然のことです！ お互いにお菓子作りの腕がどのくらいか、今の時点で把握しておくのは重要なことではないですか？」

私がそう言うと、シータ様は私にライバル認定されたことが嬉しかったのか口元を緩め、満足げな顔で私を見た。

「あ、あなたがどうしても言うのなら、私の実力を見せてあげてもいいわ！」
この子、案外ちよい子かもしれない。
こうして、私はシート様とお菓子を作るために、一緒に厨房に向かったのだった。

「それじゃあ、作っていきましようか」

私は厨房にシート様と並んで、クッキー作りをすることになった。

そして、シート様の隣には、昨日一緒にいた使用人さんも同行してもらっている。

シート様が使用人さんから教わったという材料を机の上に並べてくれたので、食品庫から材料を探す手間を省くことができた。

並んでいるのは白い小麦粉のような粉と、バターのような塊、それと砂糖。

うん、簡単なクッキーを作る時の材料だね。

私がそんなことを考えていると、シート様は様子を窺うようにこちらに視線を向けていた。

あまり長く待たせるわけにもいかないし、そろそろ作り始めるとしますか。

「ええっと、お菓子作りは分量を正確に測り取ることが重要なんだよね。初めにこの粉の分量が――」

私はわざとらしくアドバイス混じりに独り言を呟きながら、お菓子作りを始める。

まず初めに、バターのようなものをボウルに入れて、ヘラなどで練っていく。その後、薄力粉

のような粉と砂糖を加えて、ダマつぼさがなくなるまでよく混ぜる。

いい感じに固まってきたら、それを棒状に伸ばして形を整え、冷やした状態で三十分～一時間ほど放置。いい感じに固まってきたらその生地を一口サイズに切る。

最後に予熱済みのかまどの中に生地を入れて、いい感じに焼いたら完成だ。

名づけるなら、『簡単クッキー』といったところかな。

特に捻りも何もないお菓子ではあるが、これだけの材料で作ったにしては、悪くはない味になるはずだ。

なるはず、なのだが……

「シート様。シート様はまだかまどから取り出さないのでですか？」

「今取り出したら香ばしくならないでしょ！ もうしばらく焼くの、前は焼き過ぎちゃったから、少し早めに取り出すけどね！」

「そ、そうですか」

一足早く取り出した私のクッキーは、クリーム色に程よく焼き色がついた感じになっており、バターの香り漂うよい焼き加減だった。

一口食べてみると、焼き立てということもあって、普通に美味しいクッキーができていた。

……シート様、どのくらい焼く気なのだろう？

シート様が焼き終わるまでゆっくりとクッキーを食べながら待っていると、香ばしい香りから、

「焦げ臭い香りに変わってきた。」

「シ、シータ様、そろそろ取り出さないと」

「分かってるわ！ 今よ！」

シータ様の代わりに使用人さんがかまどからクッキーを取り出すと、そこにあったのはクッキーの形をした真っ黒な代物だった

まあ、その結果は見る前から分かっていただけ。私は心配になって声をかける。

「あの、シータ様……」

シータ様は恐る恐る自分が焼いたクッキーを一口食べると、顔をくしゅつと歪めた。

「にがっ……これが香ばしいってことなの？」

「……言いにくいですが、それはただの焦げですよ。私と同じ時間にかまどから上げれば、普通のクッキーを作れるかと……」

「馬鹿にしないで頂戴。私だって、普通のを作ろうと思えば作れるわ。あなたが来るまでは、普通のクッキーをお父様にあげていたもの」

私が隣にいた使用人さんを見ると、彼女は小さく頷いていた。

なるほど、ケミス伯爵がダークマターを頑張って食べていたのではなく、前までは普通のクッキーをあげていたのか。

「あなたに勝つためには『香ばしい』クッキーを作らないとなの……」

それがこんな状態になったのは、私への対抗意識が強く出てしまったということなのだろう。

どうやら、どうしても香ばしいクッキーを作りたいらしい。

どうしよう、参ったな……

私は少し考えた後、小さく咳払いをして言葉を続けた。

「クッキーを香ばしくするいい方法があるのに、知らないなんて……これは私の勝ちかもしれないませんね」

「な、なんですって!?!」

「私はその秘策を知っているので、勝負の時はそれを使うことにします。そうだ、材料があるか確認しない?!」

私は独り言混じりに必要な材料を探して厨房の机の上に置くと、それらの材料をあえて戻さずに厨房を後にした。少々わざとらしくかったかもしれないけど……

使用人さんに目配せをしておいたし、後は上手くやってくれろと信じよう。

意地を張っている状態では私の声はきくと届かない。だから、自分で気づいたと錯覚させることが重要なのだ。

私は無言のアドバイスを残して、シータ様が香ばしいクッキーにたどり着くことを静かに願うのだった。

第三話 秘密の冒険

それから、私はシニティーの冒険者や、ケミス伯爵に料理を振る舞って数日を過ごした。シニティーの冒険者には『豚汁』を作ったのだけど、大喜びされて、また来てくれとお願ひまでされてしまった。

「あれ？ シータ様？」

そんなある日、私がシニティーの冒険者たちの容態よぶたいを見に行こうと街に向かっていると、見覚えのある赤茶色の髪をツインテールにした女の子——シータ様を見つけた。

シータ様は何か隠れるように小さい体をさらに屈かがめて、ちょこちょこ馬車乗り場に向かっている。

あんなところで何をしているのかな？ ん？ ていうか、いつも一緒にいる使用人さんはどこにいるんだろう？

私がそう考えていると、シータ様は御者とこそそと話して、そのまま馬車に飛び乗った。

え？ 一人でどこに行く気？

私は慌てて追いかけたが、馬車は私を気に留めることなく発車してしまった。

え？ うそ、シータ様一人で外出なんてして大丈夫なんだろうか……？

「お嬢ちゃん、どうかしたのかい？」

私が行ってしまった馬車を見ていると、馬車乗り場にいた眼鏡をかけた御者に声をかけられた。もしかしたら、行き先を知っているかもしれない。

私はそう考えて、さつき馬車が走っていた方角を指さした。

「あのつ、さっきのツインテールの女の子どこに行ったか分かりますか？ えっと、友達なんですけど」

「ああ。あの子か。あの子なら、『ルミナスの茶屋』に行くという話だったよ」

「『ルミナスの茶屋』？」

私が初めて聞く店の名前に首を傾げると、御者は頷く。

「お父さんの好きな茶葉が切れちゃったから、街に買いに来たらしいね。でも、店の方も売り切れていたから、茶屋に直接買いに行くんだってさ」

「そうなんですか。まあ、茶屋に行くだけなら、一人でも行けるかな？」

「うーん、大丈夫だとは思うんだけどねえ」

馬車に乗ってお使いに行くだけなら問題ないだろうと思っただが、御者は何とも言えない表情をしていた。

なんでそんな表情をするのだろう？

「何か問題があるんですか？」

「普通ならいたしたことないんだけどね。ただ今は修繕中しゅうぜんちゆうで馬車が通る橋が渡れないんだよ」

「え？ それじゃあ、『ルミナスの茶屋』には行けないんですか？」

「いや、歩行者用の橋は生きてるから行けないわけではないんだけど……歩くとき少し距離があるんだよ。それでもいいから乗せてくれてあの子が言うから乗せてあげただけど、少し心配で」

私は御者の心配そうな顔を見て、あまりよくない未来を想像してしまった。

シータ様は意地になつてしまふ性格だ。多分、無茶をしても茶葉を手に入れようとするはず。

多分、伯爵家の娘なのだから、山道とかを歩いた経験も少ないだろう。フェンリルとして数年生きてきたから分かるけど、この世界の山道って結構危ないんだよ。

無理して進んで迷子にでもなつたら……

私がどうするべきかむむつと考えていると、御者が私の肩にぽんと手を置いた。

「ちょうどいいから一緒に行つてあげるのはいかがかな？ あのお嬢ちゃんよりも、君の方が落ち着

いているみたいだ。今からなら追いかけてあげられるよ」

「本当ですか？ 今から追いつきますか？」

「ああ。行き先が分かつてるんだから訳はないさ」

私は御者の言葉を聞いて頷く。

今からケミス伯爵の屋敷に戻つてこのことを報告していたら、シータ様がどんどん先に進んでし

まう。それなら、今すぐ追いかけてしまった方がいいだろう。

私は小さなこぶしをきゅつと握つて、気を引き締める。

「分かりました。それなら、お願いします！」

私は馬車に乗り込んで、シータ様を追いかけることにした。

御者の協力もあつて、すぐにシータ様に乗った馬車が見えてきた。

それからしばらく走つたところで、馬車はゆっくりと停車する。

私たちの馬車が少し後ろで停車したところで、外からシータ様の声と、馬車の御者のものらしき声が聞こえてきた。

「橋が壊れてるから、馬車で行けるのはここまでだよ。帰りの馬車が来るのは三時間後になるから遅れないようにね」

「ええ。分かっているわ」

「……本当に一人で歩いていくのかい？ あまりお勧めはしないけど」

「ご忠告ありがとうございます。でも、私は行かないといけけないのっ」

「あつ、ちよつと」

私はシータ様にバレないように馬車から顔を覗かせる。すると、ちょうどシータ様が御者の制止を振り切つて、ずんずんと歩行者用の小さな橋に向かつていた。その先は傾斜は緩いが山になっており、貴族のシータ様が一人で登つていくのは少し大変そうだ。

「お嬢ちゃん、追いかけないのかい？」

御者は馬車を止めても私が降りてこないのを心配したのか、様子を見に来てくれた。

「今行きます……あっ」

私は急いでシート様の後を追おうとして、重要なことに気がついた。

今、シート様は私に意地を張っている最中だ。こんな正面から私が助けに来たと言ったら、シート様に帰れと言われてしまうかもしれない。

山に入るわけだし、隠れながらなら問題ないかな？

でも、もしも気づかれてしまったら……

「どうしたんだい？」

私が頭を悩ませていると、御者が首を傾げる。

そんな御者の頭の上に乗っているモノを見て、私は「あっ」と声を漏らした。

「あの、後で絶対に返しに行くので、その帽子をお借りしてもいいですか？ あまり正体はバレたくないというか……」

私がそう言うと、御者は帽子を手を取ってから、シート様が走っていった先を見つめる。

「なるほど、喧嘩中ってところかな？ 貸すのは問題ないけど、帽子を被ったただだとバレてしまふんじゃないか？ よっし、特別にこれも貸してあげよう」

御者は考える素振り^{そぶ}りをしてから、胸元から眼鏡ケースを取り出す。そして、その中から黒縁の眼

鏡を出して、私に渡してきた。

「え？ 眼鏡までお借りしてもいいんですか？」

「構わないよ。それ、この前落してレンズが取れてしまったんだ。修理に出そうと思っていただけど、その前にお嬢ちゃんに貸してあげよう」

「……本当だ。レンズがないですね。ちょうど伊達メガネ^{だて}になってる」

私は受け取った眼鏡をかけても、視界が全くぼやけ^{ぼや}けないのを確認して、「おおっ」と小さく声を漏らす。

御者はそんな私を見て小さく笑う。

「それじゃあ、ちゃんと仲直りしてくるんだよ」

「はい！ ありがとうございます！」

私は帽子を深く被ってから、眼鏡をしっかりと掛け直した。

……変装にしては簡易的すぎるかな？

「おおっ、これならお嬢ちゃんだつてバレないね。一瞬、分からなかったよ」

「ほ、本当ですか」

御者は感心するようにそう言うと、何度もうんうんと頷いていた。

御者の反応を見る限り、自分で思っている以上に別人になれたらしい。

御者にほっこりとするような笑みを向けられた気がしたけど、今はそんなことを気にしている場